

高校生の進路選択を考える

第7回

このコーナーでは、社会が変化し、大学教育・高校教育・大学入学者選抜も変わっていく中で、高校生の進路選択は、高校での進路指導はどのように変わっていくのか、考えていく。

今回は、東邦大学付属東邦中学校・高等学校の、2名の先生にインタビューした。同校は、医・薬・理・看護・健康科学の5学部をもつ東邦大学の付属校であり、入学当初から、医療系や理工系の学部・学科を志望する生徒が多いのが特徴だ。志望が明確な生徒は学習に向かう意欲を持ちやすい一方、早期に絞り込むことで、生徒が本当にやりたいことや適性を見逃してしまうことにもつながりかねない。また、学部・学科が決まっても、実際には将来のイメージを明確にできていない生徒もいる。そうした生徒の視野をいかに広げ、そして深めていくか、お話しいただいた。

CONTENTS

東邦大学付属東邦中学校・高等学校 p41

- ▶ 入学後に志望進路を一旦リセットし、将来の可能性を広げるところから進路選択を再スタート
- ▶ 生活知、経験知の不足が課題。身近な話題から社会の仕組みに目を向けさせる
- ▶ 模擬面接で志望理由を問い続け、本当にやりたいことを考えさせる
- ▶ 好きなこと・好きなものからスタートして、進路を考えさせる

東邦大学付属 東邦中学校・高等学校 (全日制)

◇所在地：千葉県習志野市泉町2-1-37

◇沿革：1952(昭和27)年 東邦大学付属東邦高等学校創立
1961(昭和36)年 東邦大学付属東邦中学校設立

◇学級編成(高校)：1年8クラス、2年9クラス、3年10クラス

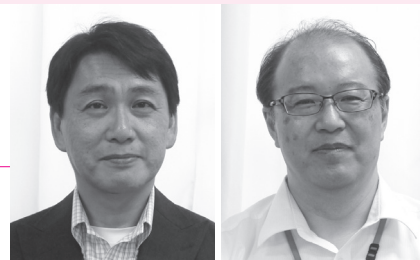
◇生徒数(高校)：1,049名(男子643名、女子406名)
2017年4月現在

◇特色：1925(大正14)年、額田豊、晉兄弟により設立された帝国女子医学専門学校を前身とする東邦大学の付属校として設立。「自然・生命・人間」の建学の理念の下、中学・高校時代を「自分探しの旅」としてプロセス重視の教育を行っている。

◇卒業生の進路：2017年5月5日現在 卒業生369名
・進路：4年制大学240名、専門学校1名、その他128名
・合格者の内訳(現役生、延数)：国公立大学86名、大学校1名、私立大学573名

生活知、経験知を高めて、進路の幅を広げ 6年間を通じて「真の志望」に気付かせる

東邦大学付属東邦中学校・高等学校 進路指導部長 **廣瀬 信也** 先生
国際交流室長 **上野 純也** 先生
(本文中、敬称略)



廣瀬信也先生

上野純也先生

志望進路を一旦リセットし 将来の可能性を 広げるところから 進路選択を再スタート

——貴校の生徒さんの特徴について教えてください。

廣瀬 本校は東邦大学の付属校ということもあり、生徒の約7割が理系に進学し、その半数近くが医薬系の学部・学科に進学します。入学時から、医薬系や理工系の大学への進学を志望している生徒が大半です。早いうちから志望が決まっているのは良いことである反面、生徒自身や保護者の思い込みから、将来の可能性を狭めてしまうことにもなりかねません。また、中学校から本校に入学する生徒は、小学生の頃から塾に通っている割合が高く、中には自宅と学校と塾しか知らないような、生活圏が狭い生徒も見られます。

そこで本校では、まず進路希望を一旦まっさらにさせるとともに、さまざまなプログラムを用意して、進路について考えさせることを心がけています。

——具体的には、どのように進路指導をしていらっしゃいますか？

廣瀬 まず中1では、身近な職業を

理解させることを進路指導の目標としています。そこで、夏休みに保護者への職業インタビューをさせています。その際保護者には、取引先など他業種との関わりも含めて話していただくよう、お願いしています。生徒にさまざまな職業を知ってもらい、興味の幅を広げさせるためです。そして1月には「職業講話」の場を設け、数名の保護者に、さまざまな職業について話をさせていただいています。

中2では、自分の適性・興味・関心を発見することが目標です。そこで、夏休みの職業調べでは、職業のリストと職業を紹介する冊子を配付して、さまざまな職業を紹介します。その上で、知っている職業と知らない職業に分けて、興味を持った職業について、深く調べさせます。2月の「職業講話」では、生徒にアンケートを取り、関心の高い職業の方を4～5人お招きして、話をさせていただいています。

中3では、将来就きたい職業に就くための学部・学科調べをさせます。この時、生徒は苦手な科目を学ぶのを嫌がる傾向があります。そこで我々は、大学受験までまだ時間があるのだから、たとえ苦手でも興味があり、将来の夢を叶えることを前提

に選ぶようアドバイスしています。

9月には、進路適性検査「R-CAP for teens」^(注)を受検します。適性検査を行うのは、固定観念にとらわれずに視野を広げることが目的です。生徒の希望通りの職業や学問が出る場合が多いのですが、予想外の結果が出るのもありがたいですね。適性検査が正しいということではなく、こういう見方もあるんだということで、進路について考えさせる材料としています。

2月には、本校の卒業生で大学や大学院卒業を控えた学生に依頼して、その学部・学科を選んだ理由や社会に目を向けた話をしてもらっています。

高校になると、校外に出ることが多くなり、高1の6月には、希望者を対象に東京大学、東京工業大学、一橋大学の見学会を、12月には東邦大学医療センター佐倉病院の協力を得て、「ブラックジャックセミナー」と名づけた外科医師体験を実施しています。また、高1・高2では、オープンキャンパスに参加し報告することを夏休みの課題としています。

(注) R-CAP for teens…(株)リアセックが開発した、学問適性、職業適性、キャリア意識に関するアセスメント。客観的に自身を知る手がかりになると同時に、キャリア意識を高める機会ともなる。

身近な話題から 社会の仕組みに 目を向けさせる

——進路指導をする上で、課題と感じていることはありますか？

上野 進路指導の場面に限らず、現在の生徒は、以前に比べて生活知、経験知が不足しています。私の担当は社会科ですが、世界史で大航海時代について学ぶ単元では、リスボンでコショウが同量の金と取引されたというエピソードが取り上げられます。ところが、現在の生徒はコショウの値段も金の値段も知らないため、コショウがどれだけ高価であったかをイメージすることができません。コショウに限らず、生徒はコンビニで自分が買うものの値段は知っていても、それ以外の物の値段は知らず、その背後にある経済システムについて考えることもまずありません。

そこで、コショウの値段はスーパーマーケットなどで調べ、金の値段は新聞を見てごらんと言うのですが、最近新聞をとっていない家庭が増えています。社会科は、日常生活の中に教材がいくらでもあるのですが、生徒がそうした教材に接する機会はどんどん減少しています。

廣瀬 また、最近の生徒は、調べるように言った事柄については調べますが、その周辺のことと一緒に調べない傾向があります。つまり調べるように言われたことだけ調べて、それ以外のことに関心が向かないのです。インターネットでの検索も、キーワードでヒットしたものしか見ないですね。

私が担当する英語科の場合、よく、紙の辞書と電子辞書のどちらがいいかという議論があります。辞書とし

てはどちらも同じなのですが、紙の辞書は、調べたい単語以外の単語も目に入ります。そうした副産物がどんどんなくなっているのが、今の生徒にとってのデメリットなのだと思います。

上野 生徒の視野が狭くなっているのは、将来就きたい職業についても同様で、具体的にイメージできる職業が非常に限られています。

廣瀬 低学年の生徒に、関心がある職業を聞くと、医師や薬剤師をはじめ、弁護士、教員など、職業と仕事内容の関係がわかりやすい職業の人気が高く、わかりにくい職業には、関心を持ちにくいようです。理工系も、「建築家になりたい」と言う生徒はいますが、それ以外の希望を持つ生徒はあまりいません。実際には機械工学系や電気・電子工学系、さらに人文・社会科学系の学部・学科に進学する生徒も多いので、それらの進路のイメージも持たせられるように心がけています。

——生徒の視野を広げるために、工夫していることはありますか？

廣瀬 進路指導部では毎年7月、11月、12月の3回、東邦大学をはじめとする大学にご協力いただいて、全学年の希望者を対象に「学問体験講座」を開催しています。薬学部と理学部が中心になりますが、さまざまな分野の先生を招き、大学でどのように学ぶのかを伝えています。また、中学では、国語科で「読書マラソン」、数学科で「数学トレーニングマラソン」、英語科で「スピーチコンテスト」「英文絵日記」「リーディングマラソン」、社会科で「社会科博士号」といった取り組みを展開しています。参加は任意で、生徒が関

心のある方向に進むのを支援するのが目的です。理科は、実験を多く取り入れるなど、実際に体験させることに力を入れています。

上野 普段の授業においては、生徒があまり目を向けないことについて、機会を捉えて言及するようにしています。例えば、先日、女優の波瑠さんが大同生命のテレビコマーシャルに出ていたので、彼女が演じていたNHKの朝の連続テレビ小説「あさが来た」の主人公は、大同生命の創業に関わった広岡浅子さんがモデルで、その関係で起用されているということをお話しました。こうした話を通じて、生徒にとって想定外の視点をもたせることが、社会での出来事との関連性などについて考えさせるきっかけとなり、視野を広げることに繋がっていくと考えています。

志望理由を問い続け 本当にやりたいことを 考えさせる

——高3の生徒に対して、意識されていることはありますか？

廣瀬 近年、入試で小論文や面接を課す大学が増えています。そのために面接の練習をすると、志望理由をきちんと話せない生徒が多いですね。1回で大丈夫という生徒はまずおらず、面接の練習を重ねることで、やっと将来について深く考えられるようになります。

例えば、医学科を志望する生徒に「臨床医と研究医のどちらになりたいか」と尋ねると、8～9割の生徒は「臨床医になりたい」と答えます。そこで「どこで働きたいか」と聞くと、「東京」と言います。続いて「どんな医師になりたいか」と聞くと

「困っている患者さんを助けてあげたい」などと言うので、「困っている人は東京より地方にたくさんいると思うけれど、地方の医師になったらどう？」と質問を重ねると、答えに詰まってしまいます。「もう一度よく考えておいで」と、後日改めて面接練習をすると、「地域医療をがんばりたいです」と言ったりしますが、「では、地域医療を担う医師と都会の医師ではどこが違うと思う？」と聞くと、また答えに詰まってしまいます。高3生でも、職業に関する知識と、自分が働くイメージを結び付けるのは難しいのです。

このようにして、多い生徒で5回、6回と面接を重ねると、生徒は自分の中の矛盾点や、自分の幼さがわかってきます。もっと早くから考えさせたほうが良いのかもしれませんが、中学生であれば「僻地の医師になってがんばりたい」というだけで良いわけですし、家庭の事情など、実際に進路を決める高3になって初めて向き合える現実もあります。教員にとっては、どの段階でどこまで考えさせるかが指導のポイントとなります。

将来について深く考えていない生徒でも、教科の成績が良ければ志望校に合格できてしまいますが、そうした生徒は大学進学後に悩むことが多いようです。特に医歯薬系や理工系の学部・学科では、研究や実験・実習、国家試験などで、かなりの学習量が求められるため、その道に進む理由を詰め切れていないと、大学での学びについていけなくなってしまいます。そうした事態は避けたいので、できるだけ高校生のうちに悩ませてあげたいですね。

一方、模擬試験でD判定、E判定

というように成績が芳しくない生徒でも、将来のイメージが明確になっていれば、最後に成績が大きく伸びて合格できることが多々あります。

ですから本校では、高3の三者面談でも、受かりやすい大学はどこかという視点でお話ししないようにしています。志望校を変えても合格できるとは限りませんが、生徒が納得した大学を受験するように勧めています。

好きなこと・好きなものから進路を考えさせる

——医学科志望者以外についても同じですか？

上野 基本的に同じです。ただ、昔は就きたい職業を考えて、ゴールから逆算させるのが進路指導の主流でしたが、現在の子どもたちが社会に出るときには、65%が、今、存在しない職業に就くと言われています。そこでここ数年は、好きなこと・好きなものからスタートして進路を考えさせるようにしています。それでは不安に思う生徒もいますが、「好きなものに本気で取り組んでいたら、自分ひとりくらいは何とか生きていけるよ」という話もして、安心させています。

——好きなことがわからないという生徒も多いと聞きますが。

上野 「これを好きと言っていいのだろうか」という心理的なハードルがあって「好きなことがない」と言う生徒も多いのではないのでしょうか。SNSで「いいね!」を押してもらいたいというような、承認欲求もあるでしょう。そのために、自分の気持ちを固めることができないのかもしれない

れません。

——自分の気持ちに気が付き、固めさせるには、どうすればよいのでしょうか？

上野 1つは、ロールモデルをたくさん見せることです。もう1つは、今の生徒は自分を客観視することが苦手なので、自分の言動を疑うところから始めさせています。当たり前と考えていたことを疑った上で、責任をもって行動したり発言したりすることが、自分をもつことにつながります。

——最後に、進路に関して、保護者に伝えていることはありますか？

上野 生徒の経験知を高めるために、できるだけあちこち一緒に出かけてくださいと伝えています。

廣瀬 最近は、「子どもが家で話さないで、様子を教えてください」という保護者が増えています。中高生は反抗期を迎える生徒が多いため、保護者も関わり方が難しく、進路について話し合えない家庭もあるようです。しかし、この年代の生徒もいつも反抗しているわけではありません。そこで、「お子さんが弱気になっているときや、気分が乗っているときなどを捉えて、きちんと向き合ってください。進路について話してください。そうしたときこそ『親の腕の見せどころ』です」と伝えています。保護者と向き合って進路について話し合う時間がどれだけとれたかで、高校卒業時の達成感や充実感が異なるので、是非、お子さんと話していただきたいと思います。